



笠松の偉人

国定教科書(修身)に載った郷土の偉人

(漢詩人)伊藤 冠峰

シリーズ①

伊藤 冠峰は、江戸時代の漢詩人です。

冠峰は、1717年(享保2年)に三重郡菰野村(現在の三重県三重郡菰野町)に絹物商の次男として生まれ、子どものうちから、ぜいたくな暮らしをしないで、物を大切にしよう育てられました。性格も素直で努力家でしたし、本を読むことが何より好きな少年でした。



29歳の時、店を兄弟に任せて名古屋で儒学と医術を学び、1756年(宝暦6年)に名古屋から笠松村に移り住みました。屋敷に竹を植えて「緑竹園」と名付け、病气の人を治したり、学問を教えたり、百姓仕事をしたりして、村人から大変親しまれていました。(中央公民館横に石碑があります)

国定教科書に取り上げられた出来事は次のことからです。

ある時、冠峰の友人が江戸で塾を開いたのですが、火事にあい、たいそう貧しくて名古屋に残してきた妻子を江戸へ呼ぶことができません。妻や子どもの切ない気持ちを思った冠峰は、自分の田畑を売り、家屋敷を質入れして、江戸への旅費をつくって友人の妻子にあげました。友人はこの友情をたいそう喜び、後日、お金を返そうとしましたが、冠峰は「あなたと私は親友ではありませんか」と、ついにお金を受け取りませんでした。

友人が災難にあったのを知ったら、進んで助ける心掛けを学びたいものですね。



伊藤冠峰の石碑(中央公民館)

詳しくは、町ホームページ(「モラルセンス一覧」で検索< No.5>)をご覧ください。

かきまつの民話「誓願寺の門前市②」

誓願寺の門前市②

この灸は、肩つまりや頭やめに、よう効いた。そりや、熱い灸やけど、近くの人のもとより、尾張や稲葉の近在から来る人の数は、一日に六百人にもなった。

「おはようござえます。」

庫裡の表戸をあけて、おと

みが入ると、

「ああ、おはよう。おとみさ

はいつもはやいなあ。」

「おしようさま。きようは

お願いがあつてきました。

おしよう様んとこの門で、

焼きだんごを売らせても

らえませんか。」

「ふうん、ええことを思いつき

なされたなあ。そりやええ

こっちゃ。どうぞ売りな

さい。焼きだんごの味でお

灸の熱さを忘れま

ろ。」

「ありがとうござえます。

ほんならよろしゅう頼ん

ます。」

門の仏様に、ふかぶかと頭

をさげると、おとみは、急いで

帰った。

家につくとすぐ、だんご作

りをはじめた。毎日やってい

る仕事でも、きようはお寺へ

店を出すことが決まったこと

で、心が明るかった。その手は

早く、五、六個のだんごが一

ぺんに丸められた。

だんごは、いつもより二か

ごも多く作った。

誓願寺の門前は、灸帰りの

人でにぎわった。

(つづく)